thyee friends

杉の双子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｈｙｅｅ　ｆｒｉｅｎｄｓ

【Ｎコード】
Ｎ７９７３Ｘ

【作者名】
杉の双子

【あらすじ】
飛んでみたい、どこまでもどこまでも

0話

いつからか、自分の考えが変わった。
昔、といっても1年前とか2年前とかそんなころの話だけれど気づいたら自分の感情のベクトルの向きが変わっていた。
それは別に良い方に向いたとか悪い方に向いたとかそんなのではなくて。
自然に、ごく普通にいままでの考えなんて無かったかのように、消えていったのだ。
あと、みんなと過ごすのは短い人で1年。長い人で3～6、10年ぐらいだ。
10年まで過ごしたというのは限りなく自分に必要な人間だけだとは思うが、あと1年、3年間の間はほとんどの人が一緒。
昔は、それが良かった。楽観的に考えていて、嫌なことがあるとあと1年～3年間の間我慢すればいいんだ。それぐらいはできる。良いことがあると、あと1年～3年もの間過ごすんだ、それまでにいい思い出を作ればいい、それに一緒の高校に行けばいい。そんなことを考えていた。
そんなことは無い。
今、もう別れが一つあった人としては新しい人間関係をはっきり言って作りたくは無い。
嫌なことがあればあるほど別れの時は楽しくなる、うれしくなるワクワクだ。
だけど、今はそうじゃない。もうい新しい関係などいらない。作りたくない。仲良くなればなるほど、別れの時がつらくなるだろう？
みんなで一緒の高校なんかにいけるはずが無い。一生合えないことは無いけれど、今までずっと過ごしてきた一緒に過ごしてきた人たちが急に日常から消え、あらなた人間関係ができ、それがまた新たな日常になる。

それが怖いんだ。
今過ごしていることは、どれだけ楽しいことが合っても、その記憶はいつか忘れられる。
怖いよ、とっても。
楽しいことがあればあるほど、みんなにやさしくされればされるほど、うれいいことがあればあるほど、
みんなと別れたとき、つらいんだ。
　でも、今いえていることは今が楽しいから。
きっとまたすぐにこんなことは言えないようになるだろうと思う。
だけど、それは今の私達にとっては普通なことで、当たり前なことで、誰にでもあることなんだって思うようになって、今はとっても一緒に過ごしている友達とか、とってもとっても感謝している。
新しい出会いが合ってすぐ、こんな子といっている私は少しは変わってはいるかもしれないけれど、別にいいんだ。
　自分だって、人間関係でつらい思いはしたことがある。
それはとっても苦い苦い記憶でそれでも今は思い出になっている。
それは私にとっても良いものをあたえてくれて
それは今後の私にとって悪いものを残してくれた。
消そうとしてもどうしても残る傷跡を、私には見えないみんなの傷跡・・・。
それを私はどう消していくのだろう。

これはこれは、不思議なお話。
運命って信じているかい？この話を通じて少しは運命って言葉について考えてほしい。
きっと、運命は誰にでもあることだから――――――

プロローグ

私は嫉妬をしている。
誰にでもないあなたに、とても強い嫉妬心を抱いている。
そのことをを気づいたのは、少し前のことだけどその思いはどんどん暗闇へ、黒く黒く深く深く染まって、落ちて行く。
『友達の友達は敵』
正論だ、今は本当にそう思う。
昔は、戯言だとかみんなと仲良くすればいいじゃないかとかそんな甘ったれたこ事を思っていたけれど、そんなことは絶対にない。それこそが戯言だと思う。
小学生低学年のころはさ、みんなで仲良くしましょうとか学校の先生はよく言うけれど、高学年ぐらいになると、言わなくなるだろう？だってあわない人ぐらいたんまりいるもんね。
そう人と無理に付き合っていたら、自分が壊れてしまう。
今の自分のように・・・
もう我慢しない。
（駄目だよ、怖いよ）
無理に自分を作りたてない。
（今までの自分は何？）
自分をさらけ出せ。
（無理だよ、無茶だ）
猫なんてかぶる必要はない。
いいこチャンの建前なんて壊してしまえ。
（そんなの・・・今までの私は、）

何だったの？って、自問自答を繰り返す。
いつまでも、いつまでも・・・
私はいつだって優柔不断だから。

1

新しいクラスの掲示板の前には人がいっぱい群がっていた。
私は、人が多かったから掲示板を見に行くのを、躊躇っていた。
すると同じクラスになった友達が自分のクラスを教えてくれた・・・。

そこまでお節介をかけなくてもいいと思ったが、自分もすこし躊躇っていたので一応感謝の言葉を言っておいた。
まぁ、新しいクラスには結構仲のよい友達はたくさんいる方だ。少し満足しているとやっぱり悲しい情報も入ってきた。
親友とは両方ともクラスが離れてしまった。
そう、両方。
親友が二人もいるのはおかしな話だろうか？
2、3年のときにできた親友と5年の時にできた親友。どちらかといえば今は5年の時にできた親友の方が仲良くしている方だ。
私の親友と私の親友の二人はあまり仲が良くない。
仲が良くないなんて言い方をすると、まるで喧嘩をしているように思えるが別にそうでもない。ただ、まだ、あまり関わりをもって無いだけだ。
けれど、その親友二人は同じクラスになったようだ。
二人とも早く仲がよくなって三人でいろいろできるかなぁ、なんて甘いことを考えていた。

私のクラスは三組だった。
新しいクラスの友達と六年三組に向かっていると、ふと私は思い出した。
私の好きな人のクラスはどこだろう・・・。
と、別にそこまで熱愛していることもなかったのでその思いはすぐ

にみんなのおもしろい話でかき消されていった。

早くついたので先に席についてほかの人が来るのを待っていると、男子のメンツには少し絶望した。
ださい人、というと少し可愛そうだけれど、かっこいい人というのはまったくいなかった。
そう思うと、親友二人がいる二組がとてもうらやましかった。
けれどやはり、新しい学年、クラスと言うものには希望を抱いていた。
これから始まる楽しい生活などにとても胸を弾ませていたのだ。それがどんなものになるのかも気づかずに。
そうしているとすぐに始業式は始まった。
校長先生の話が始まる。
うんうん、今年は結構良い年になるかな。
楽しい想像しかできなかったため、校長先生のまじめな話なんて耳には入ってこなかった。

2

始業式が終わって私は習い事へと向かった。
気づくと、同じ習い事に行っている子はたくさんいた。
自分も結構な量を習っていることは自覚しているが、算盤なんてマイナーな習い事に同じ学年で同じクラスにたくさんいるとは思わなかった。
いや、同じ学年にいる事は知っていたけれど、まさかほとんどが同じクラスになるとは思っていなかっただけだ。
　もう１２歳。若干誕生日が早いから、自分は学年が上がるとすぐに歳も上がるのだ。
１２歳にまでなると、いろいろと女子関係とかややこしくなるとか言うけど、そのまんまだ。
実際に今までややこしかった事はたんまりある。
そんな経験早過ぎないか、ってぐらい。
そんな経験をしてきたからこそ、めんどくさいことには首をつっこんでいないつもりだったんだけれど、人から見ると別にそうでもなかったみたいだ。
巻き込まれている、巻き込んでいる、その両方だと思う。
自分はいろいろと考えすぎてるんじゃないか、って思うことだっていつもだ。
こう思ってることさえも、みんなは考えてるのかなって、いつもいつも考えている。
この気持ちは正常なのだろうか、みんなもそう自分と同じ気持ちを抱いているのだろうか、って。
授業中とか１人でいるときはいつもこんな事を考えている。
考え込んでいる。意味も無い、なんにも意味も無いことを。
けれど、しっかり、空気には流れているつもりだ。みんなに合わせて、流れて、みんなと同じことをする。

そうすれば何事も無く事が過ぎていくだろうと、そう思ったから、そう考え付いたから。
それを実行していた。
「えっ、ななこもう準初段受かったの？やばっうちもがんばらないかんやん、もう」
算盤で一緒に座っていた純ちゃんがそう言った。
本当の所、多分受かったのは運だ。
算盤なんかに習っていて暗算ができないと言うものほど悲しいものは無いが、それは自分だ。
私は暗算ができない。だから段も応用という、文章問題でといているのだ。
純ちゃんの少々上から目線な言葉に少しいらっときたが普通に答えておいた。
「うん、たまたま応用があっててさ、うちって結構運があるかも。」
ははっと笑って2人とも算盤の練習問題に取り掛かる。
このごろ、友達の言葉にいらつく事は確かに多くなった。
少しの短い言葉だったとしてもいらついてしまう。我慢しようとしてもさ、すぐ表情に出ちゃうから、頑張ってセーブしてるんだけれど、時々それがきかなくなってしまうのだ。
　算盤塾は、家より少し遠いところにあった。
だから行き帰りの道のりは少しきつい。しかも。今はまだ春だから、少し肌寒い。
つめた風が首の横を通り抜ける。気持ちいかもしれない、そう思えるのはそろばん塾を出てから3分ぐらいの間だ。そろばん塾の中は、びっくりするほどあったかいからだ。きっと先生が寒がりなのだろう。
急いで帰らなければ、テレビが見れない、そう思い思いっきりペダルをこいだ。
その瞬間、クラスの友達（純ちゃんとその他）が手を振って呼んでくれた。

「ななこぉっばいばいっ」
「うん、ばいばぁい」
元気よくさよならの挨拶はした。
そう思えば、今日は親友は来ていなかった。
どうしてだろう。
いつもといえばいつもだけれど・・・
やっぱり親友が来ないというのは悲しい。
風邪でもひいたのかなとでも思い、自分は音楽プレイヤーを耳にいれ、自分の世界に没頭した。

3

親友の紗和が私の所に飛び込んできた。
一緒のクラスになれなかったねぇって、とても残念そうに私には言ってくれた。
紗和は、あまり人との関係を持ってない子で、昔から放課と言えばいつも教室の端っこで本を読んでいるような、そんなポジションの子だった。
それでも結構もてる子で、背もあるし頭もいいし、ただ少し運動神経が残念だっただけだ。
話聞き上手だったから仲良くなったのかな、って思う。
まぁ、紗和とは去年クラスと算盤と習字が一緒だったからかなりの時間を一緒にすごした。
ふと気づくと、紗和の後ろには綾もいた。
微笑んではいた。
けれど、何も言ってはくれなかった。
気まずい関係までは行ってないけれどこのごろあまり話しては無かった。
　三人で話してると、新しいクラスの友達がこっちへ来て私を誘った。
親友とはばいばいをして私は三組へ、二人は二組へと入っていった。
クラスでは、いろんな話をした。だれだれが好きだとか嫌いだとか、そんな話ばかりだった。
私はあまりそんなことは気にしていなかったので、ずっと紗和の事を考えていた。
今度なにして遊ぼうとか、算盤で一緒に座ろうかなとかそんなことだ。
「ねぇねぇななこはあいつの事どう思う？」
唐突に話が振られて私は少し驚く。

だが、そんなみんなの話など聞いていなかったため、もう一度言ってもらわなければならない。
「え？ごめん何が？」
「だからぁ、あいつだよ、あいつ。鹿野帆華。」
？。帆華。
帆華といえば、1年生から結構仲が良い子だ。
それがどうしたのだろう。
「え、どうしたの？」
「あいつってさ、先生の前ではぶってない？あたしそういうのいらつくんだよね。」
まぁ確かに。私もそういうのは大嫌いだ。
先生の前だけでは良い子ぶってる人。
だけど自分もそうだから、あまり人の事は言えない。
でも自分は、先生の前だけじゃないから。友達の前でも内心を隠して伏せて、いつも上っ面の言葉しかしゃべってない、というか話せなくなった自分だから。
あまり人の事は言えないのだ。
「うんん、まぁそうだよねぇ。」
適当に場を流す、それでいい、それが一番いい、そう確信が今では持てる。
大体、今その愚痴を言っている少女自体、私はあまり好いてはいない。だからといって別に嫌いでもない。
元、私はその子にいじめられていたから。
いじめし返したけど。それが駄目だったのかもしれないけれど、逆にそれで今までのギクシャクしていた関係がお互い言いたいことを言い合うことで吹っ切れたとも言える。
だから、今では別に嫌いじゃない。
かといって、紗和じゃない方の親友。綾。
あの子にもいじめられていた。あの子のこともいじめていた。
女王的な存在でさ、今愚痴を言っている少女にからかわれていたん

だ私達は。
だから、最初は私と綾は互いに憎み合って、死んでほしいとじかにいえてしまうほどひどい状況だった。だって綾が死んだら私はいじめられないですむから、女王様に気に入ってもらえると思っていたから。女王的な存在にあげたものは色ペン多数、メモ帳多数・・・。今から思うと別にたいしたことは無いのだが、昔の私にとっては大出費だった。
結局その後、私と綾、そのほか多数は仲良くなり、女王的な存在はいままでいじめを続けてきたばかりにみんなに反感を買って、沈んでいった。
助けたのはまたみんなだけれど。
別にいいんだ。そんな昔な事。今いえる言い分。
今が楽しく過ごせるなら、昔の事など、どうでもいい。
そう思ってないと、いろいろつらいことが多すぎるから。

だが、みんなの我慢の限界はすぐに来た。
みんなが言うとおり帆華はかなりいらつく。私達の前では愚痴言ってるのに、先生の前ではぶっていい点もらって、私達はもろ悪役。
だから今日から私達は帆華にあだ名をつけることにした。
帆華の前で悪口を言っていたらすぐに気づかれてしまうからね。
ネッシー、そう決めた。

「ななこぉ、このごろなんかみんな話しかけてくれないんだよねぇ・・・なんでだろ・・・。」
何も知らない帆華が私に話しかけてくる。
別に、とでも言いたいところだが別に何もないよなんて事はない、絶対に。
いろいろあるから、いろんな意味があるから。
「そうかな？みんな普通だと思うよ？」
「そっかぁ・・・ううん、ありがと」

華帆は少し、悲しい顔をしながらにも、笑顔を作り私にほほえみお礼の言葉を言った。
普通、ここは心が痛むところだろうけれど、私はこういうところが実際にあまり好きではいなかった。
嫌いでもない、好きでもないけれど。
だいたいいじめなんてのはやるキャラじゃない。昔、やり返したことはあったけれどそれはやはり直接的なやり方ではなく、ただ単に同じ感情を抱いている子が集まって愚痴を言っていただけだ。
だから、もうそんなめんどくさいことはしない。自分は。
自分は。その他の人がやっていても私は止めない。そこまでの善者じゃないから、そこまではしようとしない。助けもしない。単調に単調に、言われるが側っていうのにも理由はあるんだよ。
理由があるのに直そうともしない言われる人の手助けなんかはしない、実際めんどくさいだけだが。
「もうさぁ、マジ帆華うぜぇって、超イラつく」
「なんであいつってあんなにぶってんの？超きもーい」
「男子から聞いたんだけどさぁ、あいつってはなくそ食べるらしいよ」
きゃはははははは　あはははははははは
女子数人（大勢）の軍団が一斉に笑う。きゃはは、あはははと。
あぁうるさい。
自分も作り笑いしながらそう思う。
「そんなにうざいなら、しゃべんなきゃいいじゃん？あたし自身、もう帆華とはあんまりはなしてないよ？」
言ってしまった。この言葉を吐いたのは自分だ。
本心ではあるが、本心じゃないといえば本心じゃない。
ただ、自分はこの状況を悪化させようとしてこの言葉を吐いたわけじゃない。
少しでもまだ自分の中には良い、清い心が残っていて、帆華の悪口を聞いていたらそう口から漏れてしまったのだ。

一瞬、時がとまる。
みんな私のほうを見る。
爆笑。笑いがその空気を包んだ。
「そうじゃん？そんなにウザイなら無視すればいいんじゃん？」
「今まで少しは話してたけどさ、もう話さないでおこうよ」
「あ、それいいめっちゃ賛成なんですけど」
「よぉし、成立！全員、無視するよ！」
「「「「「「「「「いえぇいいぃいぃいぃ！！！」」」」」」
」」」」」」
ぎゃはははははは　あっはっはっはっは
さっきよりも悪度が増した笑いに変化した。
あぁ、変な方向に向いてしまった。こんなつもりでなかったといえばうそになる。
もういい。
あとは、彼女達に任せよう。
私は良いところで責任放棄だ。
卑怯といわれるかもしれない、この感情の中身を知ったら、みんなに批難されるかもしれない。
だけど、これが今完成した、実行している自分の姿だから。
しかたないよ。

これが私だから、許してくれ。
これが私だから、許してください。　お願いします。

許してください。

4

弱いなぁとか卑怯だなぁとか全部分かってます。自覚しています。もはやそれらの言葉は自分のためにある言葉とさえも思っています。弱いとか、自分は弱いです。すぐに逃げます。強がっても私は結局のところなにもできませんから。

卑怯だとか、卑怯でなければ今の私は、卑怯に逃げていなければ今の私はこの世界にはいないでしょう。かっこよくいっているけど、ただ単純に今生きてはいないだろうとそんな事だ。

帆華への無視は速攻で始まった。

時に考えるが、無視をするというのはいじめに入るのだろうか・・・。

しゃべりたくない、このことはあまり話をしたくないそう思ったらどうすればいいのだろう。

距離感を置くためにはどうすればいいのだろうか。友達だったら、少しの態度の変化にはすぐ気づいてしまうし、一気に無視というのもどうかと思う。

あぁめんどくさいぞ。まためんどくさい事を考えている。

気にしなければいいんだよ。きっと。流せ、この感情は自分が持っているものではない。

この身体は私のものではない。ただ自分が動かしていてるだけで本当は違うだれかがこの身体には住み着いているんだ。きっと。そう思えばいい。きっと。きっと。

だから私は確信が無い。あるわけが無い。こんな可能性が低すぎる自分の妄想。になんか可能性をかけるほうがおかしいのかも知れないが。

ただ少し、ほんの少しの希望にも夢を見る、そうしないと。

もう、それには慣れたから大丈夫。

深く考えるな、そんな時間が有ったら勉強の事を考えろ、だからお

前にはミスがいっぱいあるんだ。
前、母が言っていた言葉が脳内でリーピートエンドレスに流れる。
何を考えているのだ、私は。
「ねぇねぇどうする？男子もハナクソの事はちょっと引いてたよ？」
「マジ？男子にも言ったの？」
「って言うかねぇ、男子ももう知ってたよ？誰が言ったんだろうねぇ？」
「そうなの？まぁ結構みんなの前でもほじってるもんね」
「マジかよ、超うける」
「ってかてかぁ、誰が男子にまで言ったの？食べるなんてさ、やっぱアノ子そうとうみんなに嫌われてるよねぇ」
みんなが一斉に私のほうを見る。
「「「なんこ言った？」」」
数人が私のほうを向いて言う。
いや、言うわけが無いだろう、私はそもそも好きな人意外男子は嫌いだから。
あまり男好きと言う性格ではないから。
「いや、私は言ってないよ、そこまではちょっとねぇ」
だよねぇ　あはは
と、なるが実際みんなは私を疑っているだろう。
目がね。疑ってるんだよ、言ったのはおまえだろって。
仕方ないけど、今まで帆華と私は結構仲が良いってみんなからは思われていて、前の発言した私の言葉にもみんなは少し驚いていたから。
そうとうな恨みを帆華は買っているとでも思われているのだろう。
勝手な想像、おつかれさま。考えるだけ無駄さ、そんなの。
自分も良く考えているけどさ、っていうか今も考えているんだけど。
そう思うと私の友達ってなんだろうな、って考えることが多い。
みんなは渡しといて楽しいと本当に思っているのか、私が言ったことに対して笑ってくれて入るが、それは本当に心の底からの笑みか、

作り笑いじゃないか、とかね。
よく考える。
私は人を疑うのが好きなのかな。
前、先生には人を疑うのがどんなにつらいことかわかるか、人を信じれなくなることがどんだけつらいことかわかるか、と言われた。
人を信じる？信じたら負けだ。
私はそう思ってるから。別に良いんだけれど。
　なんかみんなの私への態度はこのごろ急変してきた。
今年からキャラを変えたせいか、それともあまり笑わなくなったせいか。
私には本当の事を言えてないのでわないかって思う。
私の前ではみんな感情を隠して、殺して、私が喜ぶようなことばかりを言う。そんな事ばかり言っても私は友達は平等だと思ってるから無駄なのに。なんて上から目線だなんて思うかもしれないけど、誰でもそうだろ？
みんなから慕われたい、そう思うはずさ。
まともな人間ならね。
まともな人間じゃなければ話は別さ。まず常識も通じない。
　去年はね、みんなに良い顔して、作り笑顔を振りまくってがんばったさ私は。
今もやっているつもりだけれど、それは少しずつ、少しずつ、崩れていっている、この事は親友に言われた。このごろあんまみんなの話に乗らないよね。
て、言われたから。
自分では気づきもしなかったけれど、意外と他人にはそういうところが敏感なんだなってこのときに学習した。

「え？」
私はこんな声を出していた。
帆華が半泣きになっていたそうだ。

泣くってどうして。無視かなんかそんな事であいつは泣くのか。
確かに帆華は泣き虫だ。いや、かなり泣き虫だ。きっとそれもみんながイラつくところベスト3ぐらいには入っているだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7973x/

thyee friends

2011年12月14日23時52分発行